

会員発表紹介

院内感染防止対策における薬剤師の関わりについて

秋田組合総合病院 薬剤科 福岡英喜、吹谷佳奈子、伊藤郁恵、
白根江里子、伊藤紫野、平泉美奈子、
川村浩樹、安保忠明

当院の院内感染対策へ薬剤師がどのように関わっているかについて紹介する。薬剤師は月1回開催の院内感染対策委員会で毎月の抗生剤の使用動向を調査報告、また週1回開催のICTの会合にもメンバーの一員として参加している。ICTでは、感染対策の諸問題の解決策を考案し、情報提供、啓蒙活動等を行なっている。情報提供や啓蒙活動の手段としてはこれまで院内感染対策だよりを定期的に発行し、また最近では、感染対策用のポスターも作製し、患者さんやその家族に対しても注意を促している。

過去2年間の注射用抗生剤の使用動向としては、全体使用量に特に大きな変動はなかった。また、系統別使用量ではセフェム系が55%と半数以上を占め、以下カルバペネム系、ペニシリン系の順であった。また、セフェム系の世代別では第三世代が54%と半数以上を占め、以下第二、第一、第四世代の順であった。カルバペネム系は4剤がバランス良く使用されていた。抗MRSA薬は毎月バラツキはあるものの、使用量の推移に大きな変動はみられなかった。

今後、薬剤の使用制限を目的とした抗MRSA薬の届け出制や適正使用の面から薬剤師によるTDMのデータ解析については検討事項としている。院内感染対策に薬剤師は今後一層消毒薬や抗生剤の適正使用の助言などを通して役割を担って行きたいと考えている。

第104回 秋田県農村医学会 (平成18年2月5日)

抗MRSA薬の適正使用に向けた取り組み

鹿角組合総合病院 薬剤科 戸舘輝人、田村亘、木村正行、大信田令子、
安保文恵

当院では、平成17年1月より抗MRSA薬のバンコマイシン、テイコプラニン、アルベカシンの使用にあたり、全患者届け出制とした。また、副作用防止、至適用量、用法の設定を目的として、投与前の初期投与量の設定、及び、血中濃度測定後、投与量の設定をする事とした。平成17年抗MRSA薬の使用件数に対して、届け出件数は90%であるが、血中濃度測定件数は75%、血中濃度測定後の解析件数は50%と、低い結果となった。血中濃度測定後約3人に1人が、解析をしていない状況であった。投与前の初期投与量の設定は、バンコマイシンしか行っていないが、至適用量、用法の設定において、効果的かつ安全な投与方法の設定でき、有用であったと考えられる。今後の課題として、届け出用紙を改善し、提出漏れ等を防ぐ事、アルベカシン、テイコプラニンにおいても投与前の初期投与量の設定をする事を検討中である。

第104回 秋田県農村医学会 (平成18年2月5日)

会員発表紹介

当院における栄養管理の現状

平鹿総合病院 薬剤科 佐藤央、齋藤由里子、池田尚子、藤木香、大隅厚、
下田航也、柴田勝弥、佐藤久美子、淡路泰志、
加藤千里、三浦修

【はじめに】昨今、入院患者の栄養管理の重要性が注目されている。これに関連して、現在当院で実際に行われている管理の状況を、特に薬剤科が深く関わっている中心静脈栄養(TPN)、経腸栄養(EN)について調査を行った。

【方法】TPN：平成17年12月1日の施行状況を、注射箋をもとに調査した。EN：平成17年12月1日～12月7日の施行状況を、処方箋をもとに調査した。

【結果】TPNの施行患者数は全体の11%で、内訳は全体97人、施行本数は127本であった。このうち、外科系は16人で23本、内科系は81人で104本であった。カロリー別では、大半が500Kcal～1000Kcalの間で行われていた。また、97人中(1人2本を含め)42人の患者で基本メニュー+補液のメニューであった。EN施行患者は全体の7.8%で、その内訳は、ラコーン30人、エンシュア・リキッド13人、ハーモニックM・F7人であった。カロリー別では大半が800Kcal～1000Kcalで行われていた。

【まとめ】今、Nutrition Support Team(NST)が話題になっているが、特に、東北地方での取り組みの遅れが他地方に比べて顕著である。またNSTに薬剤科がどのように関わっていくか、ただ単に、医師のオーダー通りにTPNを調製したり、ENを払い出したりするのではなく、今回の調査を通して、院内各部門と協調し、患者個人の栄養管理を薬学的視点からサポートしていかなければならないと感じた。

第104回 秋田県農村医学会(平成18年2月5日)

薬剤管理システムにおける記録方法の変更について

- 薬剤管理システムの導入 -

山本組合総合病院 薬剤科 田村葵、畠山純子、菊池篤、小嶋雅人、
佐々木良、高橋幸、佐々木真則、小川信二、
田口勲、佐藤博樹、藤原斉

当薬剤科では、平成12年より薬剤管理指導業務の指導記録を効率的に行うことを目的として、POSとフォーカスチャータリングを使い分ける方式を採ってきた。しかしこの方式では担当替えや、新人の教育時に指導内容等を円滑に伝達できないという問題が生じてきた。そこで今回、薬剤師間の指導内容等の伝達を円滑にする事を目的に、現在の方式の問題点を抽出し、改善することにより、記録記載方法を変更することとした。

【まとめ】薬剤管理指導業務の記述様式をPOSに統一し、薬剤師間における円滑な指導内容の伝達を試みた。また、POSは記録記載に時間を要するため、薬剤管理指導業務支援システムを使用することにより、効率的な記録を可能とし担当者の負担軽減を図った。

今後は、POSを行う上で重要なオーディット導入、標準薬剤管理指導計画の追加・分析を行い、より効率的で充実した記録記載方法としたいと考えている。

第104回 秋田県農村医学会(平成18年2月5日)

会員発表紹介

薬学6年制による実務実習内容の検討

山本組合総合病院 薬剤科 高橋幸、畠山純子、田村葵、小嶋雅人、
菊池篤、佐々木良、佐々木真則、小川信二、
田口勲、佐藤博樹、藤原斉

薬学6年制への移行により、2.5ヶ月間の病院実務実習が必須となる。そこで我々は、問題点を把握し、実務実習内容を充実させる事を目的として検討を行った。日本薬学会が作成したモデルコアカリキュラムと、当院の4週間実習チェック表を比較した結果、マナー、守秘義務等の倫理的項目、細胞毒性のある医薬品の取扱い、TDM、中毒患者の解毒方法の4項目が不足していた。TDM以外の項目は、4週間実習チェック表に追加したが、当院でTDM業務は行っていない為、取り組みが必要と考えられる。また、指導者側の知識レベルの均一化と質を確保する為、指導体制の評価の在り方についても検討が必要と考えられる。今後は、問題点を解決しながら、カリキュラム、チェック表を見直し、4週間実習を充実させ、平成22年度から始まる2.5ヶ月間病院実務実習につなげていきたいと考えている。

第104回 秋田県農村医学会 (平成18年2月5日)

ジェネリック医薬品に対する医師、患者のアンケート による意識調査について

由利組合総合病院 薬剤科 鷹島静、打矢美好、阿部充弘、佐藤武弘、
佐藤留美子、三浦純子、今村知子、堀川均、
森川和夫、齋藤玉喜

医療費の高騰により、医療保険制度改革が進んできている中、病院への支払包括化、患者自己負担の増加などにより、主に経済的な側面からジェネリック医薬品への関心が高まってきている。そこでジェネリック医薬品に対する医師、患者のアンケートによる意識調査を行ったところ医師49人、患者100人から回答が得られた。医師向けのアンケートでは、86%の医師がジェネリック医薬品を採用しても良いと答えたが、薬の品質や情報提供に対する不安等から、採用に関しては慎重になるべきという意見が多かった。患者向けのアンケートでは、薬の効き目や安全性に不安を抱いている患者が多く、ジェネリック医薬品を処方して欲しいと答えた患者は全体の25%に過ぎなかった。薬の価格よりも安全性を重要視する傾向が見られた。今後、アンケート結果より得られた情報をもとに、安全性、有効性、経済性の観点から、ジェネリック医薬品の採用を検討していきたい。

第104回 秋田県農村医学会 (平成18年2月5日)